

〔大阪城南女子短期大学研究紀要 第59巻 51 ～ 60頁 令和7年3月〕

## 保育者養成におけるボランティア体験の 教育的価値に関する一考察

芝田 圭一郎・多田 鈴子

〔研究ノート〕

# 保育者養成におけるボランティア体験の 教育的価値に関する一考察

芝田 圭一郎・多田 鈴子

## 【要旨】

本研究ノートの目的はボランティア体験がもつ教育的価値や効果について考察することである。保育者養成課程における学外実習等の実践的な学びは教育的効果が大きく、また重要な経験が培われる。同様に実践的な学びが培われるボランティア体験は学外実習等と違って時期や場所、内容などが多種多様に存在している。ボランティア体験を実際に経験した学生のインタビュー調査から、ボランティア体験が学外実習等とは違って、ボランティア体験ならではの効果や価値があることが示された。特に学外実習等はある程度制限がある中での学びや経験であるが、ボランティア体験は学生自身で選択するなどの自主性を重んじていることから自身の成長実感や達成感、満足感が高いと思われる。そのような観点からボランティア体験には学外実習等にはない教育的価値や効果があると考察する。

## 1 はじめに

筆者らは保育者（本稿では保育士・幼稚園教諭を合わせて「保育者」と呼称する）養成を目的とした短期大学にて長年、指導・養成にあたってきた。保育者養成の過程において重要なファクターであるのが「学外実習」である。近年、保育者養成課程におけるこの学外実習について様々な研究がなされ、文部科学省や全国保育士養成協議会も学外実習に関する規定の検討を続けている。筆者は保育者養成に従事する中で、学外実習の重要性は座学や演習の授業では修得できない学びが学外実習にあると考え、また実践的な学びが培われることに大きな意義があるとしている。（大嶋・芝田・玉川・中津，2023）特にこの実践的な学びは受け手である学生にとっては大きな意味をもち、自身の成長実感にも繋がることから保育者養成課程においては実践教育の重要性がとて高いとしている。（同）大阪城南女子短期大学（以下、「本学」）では実践教育の一環として「インターンシップ制度」を取り入れ、実施している。本学のインターンシップとは週に一度、保育現場（本稿では保育園や幼稚園、認定こども園での現場を「保育現場」と呼称する）にて学外実習のような実践的な体験を通して学びを深めていくことである。このインターンシップ制度を通して保育者養成の学生は大きく成長しているとともに、保育現場への就職に大きくつ

ながっている。(大嶋・芝田・玉川・片山, 2024)

しかしながら、実践的な学びが培うことができるのは学外実習やインターンシップ制度だけではなく、「ボランティア体験」も可能である。学外実習やインターンシップ制度とは違ってボランティア体験は保育現場以外でも実施されており、裾野も広く、日本全国で様々な形式で実施されている。また長年、取り組まれていることから教育的な効果も大いに期待されている。本学でもインターンシップ制度を取り入れる前からボランティア体験は実施されており、保育現場以外でも取り組み、時期や期間も多種多様である。そこで本学が実施してきたボランティア体験と学外実習、インターンシップ制度を比較しながら、保育者養成課程におけるボランティア体験の教育的価値を考察していく。

## 2 ボランティア体験

本来、ボランティア体験とはどういったものであるのか。ボランティア (volunteer) の語源は、ラテン語の volo (ヴォロ：志願する) であり、フランス語の voluntaire から自発的 (voluntary) と従事する (-eer) が結びついて成立したものである。ボランティア体験とは、自発的に他者や社会のために時間や労力を提供する活動に参加する経験のことであり、具体的には、地域活動、環境保護、福祉支援、教育支援、災害支援など、様々な分野で行われる活動が含まれ、本学のような保育現場だけではなく、多種多様なボランティア体験が実施されている。ボランティア体験の例として、地域の清掃活動、高齢者施設での交流イベント、子どもたちへの学習支援、災害被災地での復興支援、環境保護活動などが挙げられ、自発性や社会貢献、無償性といった特徴がある。ボランティア体験の意義としては他者と関わる中で共感力や責任感が養われる人間性の成長、リーダーシップやコミュニケーション能力など、実社会で役立つスキルの向上がある。ボランティア体験で学ぶことができる具体的なリーダーシップスキルとして以下のものが挙げられる。

### ① コミュニケーション能力とチームワーク

ボランティア体験では、様々な人々と関わるが多いため、明確で効果的なコミュニケーションが求められる。自分の考えや指示をわかりやすく伝えるだけでなく、相手の意見に耳を傾け、共通の理解を築くことが重要である。このようなコミュニケーションスキルは、リーダーシップの基礎となり、他者との協力を円滑に進めるために不可欠である。またボランティア経験は、基本的にチームで行われるが多いため、メンバー同士の協力が不可欠である。リーダーとしては、チーム全体をまとめ、各メンバーが持つ強みを引き出す役割が求められる。また、他者を尊重し、共通の目標に向かって協力する姿勢が、強いリーダーシップを育む要素となるのである。

## ② 問題解決能力

ボランティア体験では、計画通りに物事が進まないことも多くある。そのため、突発的な問題に対処するための柔軟な思考と迅速な対応が求められる。リーダーとしては、目の前の問題を冷静に分析し、チームと協力して最適な解決策を見つけ出す力が必要であり、これにより問題解決能力が大きく向上する。

## ③ 成長の実感とリーダーシップの実践

ボランティア体験を通じて学んだリーダーシップスキルは、自己成長と実践を通じて強化される。活動を進める中で、自分がリーダーとしてどのようにチームに貢献できるのかを実感できる瞬間が多くある。例えば、困難な状況でメンバーを励まし、適切な方向へ導くことで、チーム全体が成長し、目標に向かって進むことができたとき、大きな達成感を得ることができるのである。

保育者を目指す学生にとってのボランティア体験とは、子どもたちの成長や学びを支援するために行う無償の活動が多く、実際の保育現場を体験したり、子どもとの関わり方を学ぶ貴重な機会となる。保育現場のボランティア体験の具体例としては地域の子育て支援活動や子育て広場や子ども食堂でのサポート、保育現場でのサポート、放課後児童クラブ（学童保育）での支援、地域イベントでの子ども向けプログラム支援、病児保育・特別支援教育関連の支援が挙げられる。特に保育現場でのボランティア体験は、子どもたちと直接関わる機会を通じて、保育現場での仕事や雰囲気を実際に体験できることが第一の意義である。保育系ボランティアのメリットとしては子どもと接する経験を積むことができ、子どもの興味や行動を理解する力が身につく。また保育現場の雰囲気を知り、実際の保育現場を体験することで、将来の職業選択に役立つ。さらに子どもだけでなく保育者との連携を通じて、コミュニケーション能力や対人援助スキルが高まる。そして他者に貢献することを通して自己の成長実感や達成感を感じられる。しかしデメリットとして活動内容や時間を事前に確認し、自分のスケジュールを合わせなければならないという点である。先行研究から保育者養成校が実施している保育現場でのボランティア体験として以下のようなものが挙げられる。

- 日常の保育活動の補助（子どもたちと一緒に遊ぶ、絵本や紙芝居等の読み聞かせ、製作活動のサポート）
- 行事の手伝い（運動会や遠足での子どもたちの見守り、発表会やお楽しみ会の準備や片付け、季節の行事でのサポート）
- 特別支援を必要とする子どもたちのサポート（個別対応が必要な子どもへの支援、特別支援教育に関する活動の補助）

前述した一般的なボランティア体験の意義と同様に保育現場でのボランティア体験も他者や社会に貢献する中で、自分自身の成長や保育現場への理解を深めることに意義がある。このボランティアでの経験は、学生の教育観やスキルに影響を与えるだけでなく、社会全体においても重要な役割を果たしている。

### 3 本学におけるボランティア体験の取り組み

ここでは本学において現在実施している、または実施されていたボランティア体験の取り組みについて記す。

#### ● クリスマス会、クリスマスコンサート

本学の附属幼稚園、または保育園、そして学外実習やインターンシップを実施している地域の保育現場でクリスマス会を本学の学生が企画、準備、運営を含めて実施する。実施園は5園になり、1つの園に対して20名程度の学生が担当し、役割分担から内容まで含めて自分たちで話し合っ  
て考え、進めていた。多くの場合、劇やダンス、合奏といった出し物を子ども達にみせ、手作りのプレゼントを配るという内容であった。司会原稿なども自分達で考え、衣装、大道具、会場の装飾、手作りプレゼントなどを製作していた。クリスマス会といった行事は多くの保育現場で実施される行事であるが、学外実習やインターンシップにおいて期間があれば参加することを通して経験できることであるが、12月という季節がら上手く合わず通常であれば学生という立場では中々経験できないことである。しかし、本学において実践的な学びを培うというねらいのもと、ボランティア体験を通してクリスマス会という行事を経験できることは大きな効果があった。後述するインタビュー調査においても参考になったという意見も多数ある。そして本学においては「保育実践演習」という科目として実施しており、単位としても認めていたが、カリキュラム上、1年次に配当していたので学生の経験値が浅いため準備に相当の時間を要していた。また学生自身が主体的に企画を考え、計画的に準備するねらいもあったため保育現場のイメージがあるものの、保育者の立場からみたクリスマス会のイメージが沸かず、話し合いも含めて進行が遅くなることが多々あった。現在では新型コロナウイルス感染症の影響で中止していた期間があり、またカリキュラム改訂により形式を変更している。2024年度現在では2年次の「幼児音楽」という科目の一環でクリスマスコンサートを開催している。前回の出し物の準備や手作りプレゼントの製作といった負担は減り、2年生なので一定以上の経験値があるのでクリスマス会のイメージや子ども達のイメージも具体的であり、至ってスムーズに企画・運営している。

#### ● 夏祭り

上記のクリスマス会と同じような形式である。本学の附属幼稚園、または保育園、そして学外



実習やインターンシップを実施している地域の保育現場で夏祭りを本学の学生が企画、準備、運営を含めて実施する。実施園は 8 園になり、1 つの園に対して十数名の学生が担当し、役割分担から内容まで含めて自分たちで話し合っていて考え、進めていた。多くの場合、夏祭りの企画に保護者会が参加しているため、保育者だけではなく、保護者会とも打ち合わせを学生が実施しながら、企画・準備・運営を行っていた。内容として出店のようなブースを作り、ボーリングや輪投げ、射的、千本引きなどを運営し、手作りの景品を配るといったものが多かった。前述同様に夏祭りも多くの保育現場で実施される行事であるが、学外実習やインターンシップにおいて期間があれば参加することを通して経験できることであるが、多くは土曜日に開催しているため、学生は中々参加できない。本学においては「保育実践演習」という科目として実施しており、単位としても認めていた。カリキュラム上、1 年次に担当していたので企画・運営はクリスマス会と同様に困難さがあつた。クリスマス会と違って規模も小さいので準備内容は少ないものの、意欲が低くなる学生が多くなった。その理由として保育現場での多くの場合、夏祭りの開催を土曜日や平日の夜にしていたため、学生からすれば出席するという形で半ば強制的に土曜日や平日の夜の夏祭りに参加していたという側面もある。そのため授業外の参加になることが苦痛となる学生が多く、意欲が低くなっていたと思われる。しかし、実施後はやってみると楽しかった、勉強になったなどの意見が多くあがっていた。現在では新型コロナウイルス感染症の影響で中止していた期間があり、またカリキュラム改訂により夏祭りに参加するボランティア体験はカリキュラムに盛り込んでいない。現在では地域の保育現場や附属の幼稚園、保育園からボランティアの募集があるので、学生が各自で自主的に参加している。

夏祭りは授業として盛り込んでいたが、それ以外に夏祭りのボランティア体験を本学では実施している。筆者が懇意にしている広島市にある A 幼稚園での夏祭りにボランティアとして参加している。新型コロナウイルス感染症の影響で中断していた期間はあるものの、毎年 8 月の夏休み期間に 2 泊 3 日で実施している。この広島市でのボランティア体験では実施する内容はあらかじめ、「お化け屋敷」と決まっているものの、上記の夏祭りと同様に準備・運営は参加している学生に任されている。また夏祭り以外にその A 幼稚園での特色ある取り組みや保育環境も見学等を通して学ぶことも目的としているので、単なるボランティア体験だけではない。そして上記のような科目として設定されているのではなく、学生が自主的にボランティア体験に参加している点は大きな違いである。

## ● 防災リーダー研修

本学では、2011 年におきた東日本大震災から 5 年経過して福島第一原子力発電所事故の問題や過疎地の復興が遅れている被災地を実際に訪れ、福祉施設、幼稚園、保育園、復興まちづくり交流館等、地域の人々から、当時の話や現在の状況について声を拾い上げることを目的として、被災地研修を実施し、それを地域や周囲の人に伝えていく防災ボランティア活動教育を実施して

いる。毎年、防災教育を取り上げ、前年度の研修内容を聞く機会を学生に提供した上で、学生防災リーダーを募集して、希望者を選出し、夏休みに2泊3日のボランティア体験を行っている。

#### 4 インタビュー調査結果と考察

これまで長年に渡って上記のようなボランティア体験を実施してきたので、現在在籍している学生や卒業し、保育職に就いている者にボランティア体験を通して学んだことや生かされていると感じることなどをインタビュー調査した。特に防災リーダー体験や広島市での夏祭りボランティアを経験している学生は少なく、10名程度にしかインタビュー調査ができなかった。このことは今後の課題としていきたい。

##### 【インタビュー内容】

- 中々、経験・体験できないことができるので学ぶことが多い
- 保育学の勉強以外のこと（緊急時の対応方法など）を学べた
- 自分自身の知識がとても増えた
- 以前よりも保育に関心を持ち、自分自身での気づきを増やすことができた
- 実習とは違って評価されないことの安心感があった
- 気の合う仲間と取り組むので人間関係で苦労することがない
- とても楽しく、プレッシャーや緊張がないのでのびのびと取り組める
- 自分自身が応募して参加しているのでやりたいことができ、やりがいがある
- 保育園や幼稚園、学童でのボランティアとは違って楽しめる
- 自身の就職先で参考・活用できるような内容が多くあった

以上のような意見が挙がっている。これらの学生・卒業生に意見やこれまでの先行研究からボランティア体験の教育的意義や効果、価値を考察する。

##### ① ボランティア体験の教育的意義

ボランティア体験の意義は、他者や社会に貢献する中で、自分自身の成長や社会への理解を深めることにあり、この経験は、個人の価値観やスキルに影響を与えるだけでなく、社会全体においても重要な役割を果たしている。まず、社会貢献と地域活性化の観点から、自分の行動が他者や地域社会に直接的な影響を与えることを実感でき、地域課題や社会問題に向き合うことで、自分が社会の一員であることを実感することができる。次に自己成長とスキルの向上が挙げられる。責任感や柔軟性が育まれ、他者と協力しながら活動を進めることで、社会人としての基本的な資質を磨かれ、実践的なスキル（リーダーシップ、コミュニケーション能力、問題解決能力

など)が向上する。加えて、様々な人々と接することで、他者を理解し、共感する力が養われる。特に福祉や保育分野では、相手の立場に立って考える重要性を体感することができる。そして将来のキャリア選択や目標の形成にも繋がる。実際の保育現場を体験することで、自分の興味や適性を知り、ボランティア体験を通じて、将来目指すべき方向性や社会での役割を考えるきっかけとなる。そして自己成長とも関連しているが、新しい視点を獲得し、世界を広い視野で捉えられるようになる。

このようにボランティア体験がもたらすものとしては、個人への影響として自分自身の成長や人生の方向性に大きな影響を与え、社会への影響として小さな活動が積み重なり、地域や社会全体の活性化につながる。ボランティア体験を通じて得たことは、必ずしもすぐに成果として現れるわけではないが、その経験が自身や社会の未来に大きな意味を持つことが多いといえよう。

## ② ボランティア体験の教育的効果

ボランティア体験は、教育的な観点から見ると、保育者養成校や養成課程の授業では得にくい多様な学びと成長の機会を提供している。まず教育的効果として挙げられるのが自主性と責任感の向上である。ボランティア体験は、自発的に取り組むものであり、目の前の課題を自分で解決する力を養い、自分の役割を理解し、自ら行動する習慣が身につく。次に社会性とコミュニケーション能力の向上であり、保育現場において様々な人々と関わることで、社会性や柔軟なコミュニケーション力が育まれ、他者との協調性や適応力が向上し、多様な価値観を受け入れる力が養われることができる。そして問題解決能力の養成である。保育現場では予測不可能な課題が発生することが多く、それをその場で解決する力が試される。自分で考え、工夫し、適切な行動を取る能力が磨かれる。さらにキャリア形成への寄与である。ボランティア体験を通じて、職業観や進路選択に役立つ経験が得られ、保育現場での体験を通じて、保育士や幼稚園教諭の具体的な業務を知り、保育職という仕事や社会の仕組みを理解し、自分の適性や興味を確認できる。加えて共感力と道徳心の向上である。他者の立場に立って考えたり、支援を必要とする人々の視点に寄り添う力が育まれる。異なる世代の生活や価値観を理解することを通して、他者に対する思いやりや、社会の一員としての自覚が深まるのである。また、学校教育の補完としての学びやリーダーシップとチームワークの学びが培われる。理論的な学びを現場で活用する力が育ち、より深い理解が得られ、保育者養成校では教えられない実践的な学びを得ることができ、教室での勉強と現実世界を結びつける役割を果たすことができ、集団で行うボランティア活動では、役割分担や目標達成に向けた協力が必要になるため、リーダーとしての資質や、チームの一員としての役割を果たす力が向上する。最後に自己肯定感と達成感の向上が挙げられる。自分の行動が他者や社会に役立つと感ずることで、自信を持つことができる。ボランティア体験を通して、自己効力感が高まり、前向きな態度が身につく。例えば子どもたちが自分のサポートを喜んでくれる姿を見て、活動への意欲が高まるのである。



こういった教育的効果を高めるためには、ただボランティア体験を実施するだけでは困難であり、振り返りの実施が重要になっている。ボランティア体験を通じて得た学びや課題を整理し、自分の成長を実感できるように、事前に「何を学びたいか」「どのように貢献したいか」「どのように成長したいか」を明確に表現した目標を設定する。そしてその目標や得られた経験や学びを振り返り、整理することで自身の学びや成長、達成感を認識することができる。ボランティア体験は、単なる社会貢献にとどまらず、教育的な効果を通じて個人の成長を大きく促進している。

### ③ ボランティア体験の教育的価値

ボランティア体験の教育的価値は、保育者養成校での学びや座学では得られない、実践的かつ人間的な成長の機会を提供する点にある。これにより、知識やスキルの習得だけでなく、人格形成や社会性の発達にも大きな影響を与えているのである。ボランティア体験の教育的価値として、まず保育者養成校で学んだ理論や知識を現実世界で応用することで、より深い理解を得られ、実践的な学びを通じた知識の深化が挙げられる。次に将来の職業選択に役立つ経験やスキルを得て、保育現場の雰囲気や仕事の実際を知ること、キャリアの方向性を明確にできる、キャリア教育としての意義である。続いて、他者と協力し合う中で、責任感、共感力、問題解決能力などの社会で必要な力が養われ、人間力が育成される。さらに他者を助けることの意義や感謝の心を学び、思いやりや倫理観を実践的に育む、道徳教育の実践である。他者の立場に立って考えることを通して、そのような姿勢を養うことができる。そして上述した教育的効果と同様であるが、自分の行動が他者や社会に貢献していると感じることで、自己肯定感と達成感の向上が可能である。例えば、ボランティア活動で子どもたちから感謝の言葉をもらい、自分の努力が役立っていると実感できる。

前述した中で最大の教育的価値は学校教育との補完関係である。特に保育者養成校課程では扱いきれない実践的なテーマや保育現場の課題に触れることで、教室での学習を補完する役割を果たしている。保育現場だけではなく、地域活動や社会問題などにも直接的に関わる経験も得ることができる。この教育的価値を高めるためにはボランティア体験を単に社会貢献を目的とするだけでなく、教育的価値を通じて、自己成長や他者との関係構築、社会的な視野の広がりをもたらす学習機会とすることである。この経験は、個人の人生に長期的な影響を与える貴重な学びの場として活用できる。

## 5 おわりに

学生はボランティア体験を通して、保育者養成校で得られない学びを提供でき、そして実践的な学びが修得できる。ボランティア体験を通してコミュニケーション能力、問題解決力、チームワーク、意思決定力、組織力、自己管理能力といった具体的なスキルを得られることは、大き

な学びであり、これらのスキルは、職業生活や個人生活でも活かすことが可能な成果物である。さらに、自分自身の成長を続けることで、個人レベルだけでなく、社会全体にも大きな影響を与えることができるのである。しかし、似たような実践的な学びが得られる機会として学外実習やインターンシップ制度があるが、これらには学習としても目的や養成課程としての制限があるため、ボランティア体験にあるような自由度がない。また学外実習やインターンシップ制度では授業の一環であるので学生を評価をしなくてはならない。インタビュー調査でも全員が、学外実習やインターンシップ制度とは違ってボランティア体験では評価をされないし、自分自身が成果を出さなければいけないというプレッシャーもないことが良かったと回答している。学外実習やインターンシップ制度では自身が赴く保育現場は保育者養成校から指定され、保育現場での学び（配属場所や責任実習など）も実習先や担当者から指定される。そのため学生自身が欲している学びや経験を選択できないが、ボランティア体験は自主的に参加するため、学生自身の意欲がとても高いということが挙げられる。これはいわゆる Z 世代の特徴とも合致し、自主性や自由度を求められているため、このような考えや意見があり、自身の満足度も満たされ、自己達成感が高いと言える。その点は、今後の学外実習やインターンシップ制度に参考になると思われる。文部科学省の中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会では教育実習の柔軟化を踏まえたカリキュラムマップのイメージが示されている。（文部科学省・2023）これまでの短期集中型の実習ではなく、通年で決まった曜日などに実施する教育実習や早い段階から「学校体験活動」を経験し、教育実習の一部として代替する方法などを示している。（同）こういったことから学外実習の前段階として、または代替としてボランティア体験を活用することもできるのではないだろうか。ボランティア体験の教育的価値から考えても保育者養成校として検討する価値はある。但し、文部科学省が示している教育実習は幼稚園教諭免許状の取得課程についてであり、保育士資格取得課程を管轄している全国保育士養成協議会ではまだそこまでの検討には至っていない。しかし、認定こども園のように同じ保育現場であるので、同調していくことも考えられる。

本稿はボランティア体験の教育的価値を考察していくための研究ノートである。まだまだ論文としての完成度は高くないが、これを端にボランティア体験や学外実習、インターンシップ制度を通した保育者養成について研究していきたいと考えている。今後としてボランティア体験と学外実習やインターンシップ制度との教育的価値の違いを検討していきたい。しかし前述したようにボランティア体験を経験している学生が少ないことや本学のカリキュラム改訂によって、ボランティア体験が減少していることが課題である。学生に多種多様なボランティア体験を提供できるように教員としてもその環境を整えていきたい。

## 参考文献一覧

三澤恵（2016）「保育者養成校と保育現場の保育連携活動における現状と課題－学生の実習とボランティアに関する調査－」梅光学院大学論集 49 巻

新谷龍太郎（2017）「保育職志望学生におけるボランティア体験の意義」平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会保育研究 47 巻

多田琴子，高松邦彦（2019）「保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成」兵庫教育大学幼年児童教育研究 31 巻

西川ひろ子（2020）「保育学生の継続的なボランティア体験による学習効果と低下要因」安田女子大学紀要 48 巻

音成陽子（2021）「保育系学科の短期大学生におけるスポーツボランティアの認識と参加意欲」流通科学研究 22 巻

小林美沙子（2022）「「保育ボランティア実習 1」を履修した学生の学び」島根県立大学短期大学部人間と文化第 5 号

大嶋健吾，芝田圭一郎，玉川朝子，中津功一郎（2023）「年間を通したインターンシップの教育的効果～現状と課題～」大阪城南女子短期大学紀要第 57 巻

文部科学省（2023）中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会（第 134 回）【参考資料 4】教育実習の柔軟化を踏まえたカリキュラムマップのイメージ

中村真緒（2023）「保育者養成校における地域連携活動ー地域ボランティア実践の教育的効果ー」ユマニテク短期大学紀要 6 巻

牧瀬翔麻（2023）「学校体験活動による教職課程の充実の取り組み：教職課程初年次の保育教育職現場体験活動の実践」島根県立大学短期大学部人間と文化第 7 号

大嶋健吾，芝田圭一郎，玉川朝子，片山綾（2024）「保育者養成校の学生の就職に関するデータ分析～学外実習等との関係性について～」大阪城南女子短期大学紀要第 58 巻

（しばた けいいちろう：教授）

（ただ れいこ：准教授）